



底力と品格の我が祖国

北京冬季五輪の閉幕にあたって（中国の）大会組織委員会は、「歴史に残る五輪を開催した」と自ら高く評価し総括していました。日本選手団の大活躍もあって、私も連日テレビにかじり付き、LIVEと日々のハイライト特集に熱中していました。金3・銀6・銅9の計18個のメダル獲得という結果には、各種競技に「日本の底力」（とりわけ若い選手のタフネスさ）が感じられ、心からエールを送ったのでした。ところで、「冬季五輪」での過去通算メダル獲得数トップの強豪国は、ノルウェーであったとは意外でした。今回の北京大会でも金16・銀8・銅13の計37個のメダルを獲得しており、ダントツの一番です。ノルウェーの人たちは、「スキー板をはいて生まれてくる」と言われているほど、身体を動かすことが好きで、子どもの頃からその雄大な自然とウィンタースポーツに親しんでいるそうです。冬季五輪（雪上競技と氷上競技の五輪）は、限られた国々の選手にとっての噴れ舞台の「北欧の冬の運動会」と揶揄されるほど…。その中での日本の若者の多種目での躍進は、コロナ禍の日本国民に大きな勇気と元気をもたらしてくれました。

#	NOC	G	S	B	T
1	Norway	21	13	10	44
2	Germany	11	11	8	30
3	ROC	10	12	8	30
4	United States	7	7	8	22
5	Canada	6	5	11	22
6	Switzerland	6	6	9	21
7	Netherlands	8	10	2	20
8	Sweden	7	6	6	19
9	France	4	7	8	19
10	Japan	3	7	9	19

LAST UPDATE: 2 FEBRUARY 2022

ところで、2月20日の閉会以降は、気になるテレビ番組もなく、撮り溜めた古いアーカイブ番組を探していました。その中で改めて感動させられたのが、2016年2月NHK放映の、（日本、そして日本人とは何か？作家司馬遼太郎の日本人論の集大成）『この国のかたち』でした。国民的作家の（最後）のメッセージを2回にわたり読み解いていく番組でした。第1回は、「**辺境の島国**」という立地が日本文化をどうかたち作ったのかに焦点を当てるもの。辺境ゆえに海の向こうから来る普遍的な文化に憧れ続けた日本。鎖国下の長崎・出島の好奇心や、大陸への玄関口・壱岐の異国崇拜の風習、東大寺に伝わる神仏習合の秘儀などに着目しながら、「日本人とは何か」を追い求める思索の旅をたどる番組でした。続く第2回のテーマは、「**武士**」。司馬が注目したのは、鎌倉時代の武士が育んだ、私利私欲を恥とする「**名こそ惜しけれ**」の精神についてでした。武家政権が拡大する中で全国に浸透、江戸時代には広く下級武士のモラルとして定着したという。そして幕末、「人間の芸術品」と司馬が評する志士たちが、この精神を最大限に発揮して維新を実現させたのだと。明治時代に武士が消滅しても、700年の遺産は「痛々しいほど清潔に」近代産業の育成に努めた明治国家を生み出す原動力となったという。それが続く昭和の世に何をもちたらし、どのように現代の我々日本人へと受け継がれたのか—？「**名こそ惜しけれ、恥ずかしいことをするな**」。まさに、忘れ去られようとしている日本人独自のメンタリティに光を当てる秀作番組でした。



さて、2022北京大会の本大会に続くパラリンピック開幕までの間隙を突いて、危惧されたウクライナ侵攻が起きてしまいました。「平和の祭典」主催の中国の顔に泥を塗るような蛮行は、盟友ロシアはやらないと思っていました…

